開催報告

第67回全国家の光大会

～みんなで手をつなぐ協同の輪　食・農・地域に生まれる好循環～

第67回全国家の光大会を2月26日、福岡県・福岡サンパレスホールで開催し、愛読者代表や教育文化活動関係者など約1,500名が参加しました。

全国家の光大会前日には、東・中・西日本の3地区に分かれて都道府県代表体験発表大会が行われ、「記事活用の部」「普及・文化活動の部」に、都道府県代表者58名が臨みました。

そして、翌日の全国家の光大会では、都道府県代表体験発表大会で選出された9名が発表しました。審査の結果、「記事活用の部」は静岡県の樋田奈津子さんが志村源太郎記念賞（発表内容は『家の光』6月号に掲載）に、「普及・文化活動の部」は滋賀県ＪＡ東びわこの小西雄二郎さんが全国農業協同組合中央会会長賞に輝きました。

ここでは、「普及・文化活動の部」で家の光協会会長特別賞に選ばれた3人の発表を紹介します。

●家の光協会会長特別賞
●全国農業協同組合中央会会長賞

待ったなし！
これからどうする！？ 組織基盤！

滋賀県
小西 雄二郎（41）

所属ＪＡ　ＪＡ東びわこ
所属部署　企画総務部　くらしの活動課
組合員数　21,001名（うち正組合員7,419名）

ＪＡ東びわこはその名のとおり滋賀県琵琶湖の東側に位置し、彦根市を始め１市４町を管内とする正組合員約７千人、准組合員約１万４千人のＪＡです。

彦根市といえば、ひこにゃんが有名ですが、「いっぴー」も負けてはいません。たわわと実ったお米がモチーフのＪＡ東びわこのイメージキャラクターです。

ＪＡ東びわこが掲げる基本理念である“「食」・「農」・「地域」をつなぐ魅力あるＪＡづくり”の一役を担っている存在でもあり、この基本理念を基に、様々な事業を展開しています。

全ての事業の入口（きっかけ）は教育文化活動です。くらしの活動課に本部を置き、管内１４支店の支店長を始め、担当者が協力し合い、支店行動計画に基づき地域の組織活動を支えています。

そしてそこにはかねてより、『家の光』があります。まず初めに、当ＪＡが継続して取り組んでいる、３つの活動をご紹介させていただきます。

まずは、職員教育として、毎週水曜日の朝礼時に全部署で『家の光』読書会に取り組んでいます。当番の職員が題材を選定することで、自ら考え、学びが深まり、そして周囲の職員と共有することで組合員との会話のきっかけやネタの一つとなり、職員全体の教育文化活動への理解促進に繋がっています。

次に、組合員教育として、各地域で活動する２２の「家の光小グループ」において、『家の光』に掲載してある体操や料理を参考にそれぞれ活動するほか、一定の購読率を活動助成の条件とするなど、普及拡大と記事活用の強化に取り組んでいます。

また、家庭菜園やヨガなど、合計54講座ある「さんさん講座」の開催時や女性部活動での会議時に『家の光』読書会をすることで、仲間づくりに役立てています。

次に、食農教育として、当ＪＡでは、地域の小学２年生から５年生を対象に活動を展開しています。小学２年生は年２回、３年生は年６回「ちゃぐりんキッズクラブ」に取り組んでいます。３年生のカリキュラムでは、田植えに始まり、じゃがいもやミカンの収穫体験、県外への卒部旅行を企画しました。

４年生を対象とした「ちゃぐりんキッズ料理教室」にも取り組み、講師役を女性部「食の研究会」が担当し、最終的にはキッズ生がお弁当を一人で作れることを目指し３回のカリキュラムで実施しています。

これらの食農教育活動のポイントは、管内の教育委員会の協力を得て、教育活動の一環であることを明確に位置付けることと、班編成の時に学区をシャッフルし子ども達自身で新しい仲間づくりや、自主性の発揮を促すことです。実際に保護者の方からも「学校や家庭では体験できないことに触れられる機会であり、成長していく姿が見られ嬉しく思う」などといった声をいただき、30年近く続く取り組みとなっています。

また、今年度は新たに、管内小学校５年生全児童1,414名に対し、『ちゃぐりん』８月号を寄贈しました。８月号には「小島よしおの産地へGO！GO！」のコーナーにて、管内農家・農産物の情報と、小島よしおさんとちゃぐりんキッズ生たちとのふれあいの様子が掲載されるよう企画し、より農業を身近に感じ、地域を知るきっかけや『ちゃぐりん』の普及拡大につなげました。

しかしながら、近年、これらの活動を継続している中、大きな課題に直面しています。それは、多くのＪＡが抱えている課題でもある「組織基盤の弱体化」です。

そこで、ＪＡ東びわこでは、ＪＡとの関わり（きっかけ）の創出に向け、従来の取り組みにプラスし、組織基盤強化策として、新たに、次の３つの取り組みを始めました。

まず１つめは、“組合員大学「あぐりライフ」”です。協同組合への理解を深めることを始め、農産物のブランディングや経営戦略、更には人間力の向上を目的に開校しています。およそ50歳代までの15名程度で構成し、将来の地域リーダーの育成を目指しています。講義は、グループワークを多く取り入れることで、回を重ねるごとに受講生同士の関わり、受講生とＪＡとの関わり、受講生と担当者との関わりが深まっていることを実感します。次代を担うリーダー同士にとって、また、伴走するＪＡにとっても、良い「仲間づくりのきっかけ」、「学びのきっかけ」となっています。また、受講生の選定に当たっては、各支店長・各

営農経済センター長と連携し行うことで、組織的な一体感も生まれています。

２つめは、次世代ワークショップ「Mirayne（ミレイネ）」です。「Mirayne（ミレイネ）」というのは、「mirai＝未来」「ray＝輝く」「network＝ネットワーク」これらの言葉を組み合わせた名前であり、「明日の自分をかえていく　ここでみつける自分時間」をコンセプトに、およそ50歳以下の女性の方を対象に、様々なワークショップを開催しています。参加者が興味のあるものに、気軽に参加できるよう企画し、共通の趣味から、新たな「仲間づくりのきっかけ」、「ＪＡを知るきっかけ」を創出しています。

この２つの取り組みを立ち上げ・運営していく中で『家の光』掲載の【ＪＡ・地域】の記事などを参考に着想を得て取り組むと共に、受講生・参加者を活用モニターとし、次世代の興味や関心事のリサーチの機会としました。これらの活動を継続していくことで、わがＪＡ意識・同じ目的や趣味を持った、より強く結びついた仲間の輪を広げていきます。

そして３つめが、食と農の隙間を埋めるWEBマガジン「Umel（ウメル）」です。昨日の夜、皆さんが最後に食べたものは何でしょうか。それは誰が、どこで、どんな想いで作られたのでしょうか。

簡単に食べ物が手に入る今の時代、その便利さの裏で「食」と「農」は確実に離れてしまい、農産物がどう育ち、誰がどんな想いで作っているのか、それを知ろうとする機会も、習慣も失われつつあります。このような状況に強い危機感を抱き、「食と農の隙間を埋めることこそが、ＪＡの使命だ。今やらねば、いつやるの」と奮起し立ち上げたのが「Umel」です。地域の農家一人ひとりの想いやこだわりを、スマートフォン等を通して伝えるWEBマガジンです。紙媒体の広報誌は大切に守りながら、広報誌に掲載した記事の続きや裏側・深掘りを「Umel」で届けます。さらに、登録者数約１万５千人の公式LINE・４千人のInstagramと連動させ、情報を「点」ではなく「線」で発信してきました。

その結果、「Umel」は着実に読者を増やし、累計ページビューは20万を突破しました。これは、地域に「農家の声を知りたい」という確かな需要がある証だと実感しています。

そしてこのたび、家の光協会が運営するWEBメディア『あたらしい日日』への記事提供という形での連携が、全国初の取り組みとして昨年12月よりスタートしました。「Umel」で発信してきた農家のこだわりや直伝レシピの記事を再編集し、『あたらしい日日』はもちろん、提携する「スマートニュース」や「グノシー」などを通じて全国へと届けています。

ある農家の直伝白カブレシピの記事では、『あたらしい日日』へ掲載したところ、５万３千ページビューと従来の約31倍となる例もありました。農家の方からも「記事を読んだと声を掛けられることが格段に増えた」との声もいただきました。

「Umel」は単なる記事掲載ではなく、全国の人に「食・農・地域を知るきっかけ」を作る挑戦です。地元の魅力に気づき、応援したい農家・推し農家と出会い、地産地消への意識が高まり、郷土愛が育っていく。この連鎖を本気で生み出そうと取り組んでいます。

また、これらの情報を職員専用アプリ（EJアプリ）内で共有することで、全職員の普及意欲の向上や自己研鑽にも繋げています。

これらの取り組みが、ＪＡを知るきっかけとなり、参加、利用、応援団（仲間）へと繋がっていくこと、そして、各地域の課題や組合員の課題解決にも繋がり、10年後、20年後の強固な関係性が築かれていくのだと確信しています。

今後も家の光協会始め各関係機関と連携し、地域と組合員とＪＡが手を取り合い、その輪を広げていくことで組織基盤強化への歩みを進めていきます。

普及・文化活動の部

●家の光協会会長特別賞

寄り添いつながる　未来への循環

千葉県

諏訪　優（41）

所属ＪＡ　ＪＡ安房
所属部署　総合企画部　財務企画課
組合員数　17,959名（うち正組合員10,971名）

ＪＡ安房は千葉県の最南端に位置する館山市、南房総市、鴨川市、鋸南町の安房地域、３市一町を管内として、年間を通して温暖な気候に恵まれた地域です。

食用ナバナや南房総レモン、かんべレタス、キンセンカや房州びわなど、彩り豊かな農産物で溢れています。温暖な気候と太陽の恵みを受けたこの地域は、まさに「農とともに暮らす地域」。私はこの土地が持つ温かさと豊かさに支えられながら仕事をしてきました。

入組して約15年。支店で営農担当を経て、広報、生活文化、女性部支援など様々な業務に携わってきました。私には入組以来ずっと心に決めてきた信念があります。それは、ＪＡを地域にとって大切な「暮らしのパートナー」であり続け

る存在にしたいということです。

その想いを形にするうえで、私が大きな力をもらったのが、『ちゃぐりん』と『家の光』でした。これら二つの媒体があったからこそ、私は、子どもたちに、そして地域の方々に寄り添うことができました。本日は、その取り組みをご紹介します。一つ目の取り組みは、『ちゃぐりん』を活用した、未来を担う子供たちへの食農教育です。

私たちは、管内の小学校の「総合的な学習の時間」に出向き、『ちゃぐりん』をメイン教材として授業を行っています。授業では児童たち全員に『ちゃぐりん』を寄贈し、一緒に雑誌をめくりながら野菜の育て方や収穫の流れを説明するだけではなく、ＪＡがどんな仕事をしているのか、どのように農家さんを支えているのかを、子どもたちにも伝わる言葉で届けることをたいせつにしています。

『ちゃぐりん』のイラストは本当に優しくそして力があります。食用ナバナの授業で、農家さんの畑の写真と『ちゃぐりん』のキャラクターを並べて野菜の育て方や収穫の流れを説明すると、教室の空気が一気に変わります。子どもたちの目が一斉に輝き、「食用ナバナはどれくらいで大きくなるの？」「ブロッコリンかわいい、帰ったら食べてみようかな」と、次々に手が挙がります。

ある日、農家さんの手の写真を見せると、一人の児童が言いました。「この手で、ぼくらが美味しく食べてるナバナや野菜を育ててくれてるんだね…」。私はその言葉に胸が熱くなり、思わず息をのみました。“伝わった”そう確信した瞬間でした。授業後には、「農業に対してのイメージが大きく変わった」「次は『ちゃぐりん』の中にある図工もやりたい！」「違う野菜について知りたい」という声が必ず聞こえます。

『ちゃぐりん』が、子どもたちとＪＡを結ぶ“心の架け橋”になっていることを感じます。この取り組みは、地域の新聞社にも大きく取り上げられました。ＪＡの役割を子どもたちが誇りをもって語ってくれたことは、私たちＪＡ職員にとって何よりの励みになりました。こうした授業が評判を呼び、教育現場からも評価されています。昨年度は１０校以上の小中学校から食育についての授業依頼が届きました。

『ちゃぐりん』で心を開いた子どもたちに、教室の外の“本物”も届けたい――そんな思いから、広報誌取材をきっかけに交流を深めた担い手農家と連携し、圃場での出前授業を始めました。

田んぼでは、藻やザリガニをとりながら水稲が育つ環境を知り、泥に足を取られながらも笑い声をあげる子どもたちの姿に、農の原点が静かに浮かび上がります。最新の田植え機に乗った瞬間、「農業ってこんなにすごいんだ！」とはじける声。小さな手で握るレバーが、未来の農業を支える力になるように感じまし

た。さらにキュウリの遠隔操作授業では、画面越しにハウスが動き、子どもたちの瞳は驚きで大きく開きます。

“楽しい”、“感動した”という表情が、うれしかったんです。安房地域のこれからを担う子どもたちに、農の温もりと希望が伝わったという手ごたえがありました。

また、伺えなかった小学校へも食や農を知ってもらうきっかけづくりとして限られた予算の範囲内で毎年寄贈を行っています。

さらに、街中で子どもたちに会うと、「あっ！すわっちだ！」と笑顔で手を振ってくれるようになりました。その瞬間、ＪＡが地域に寄り添うとはこのことかと、自分なりに感じました。『ちゃぐりん』を活用した授業が、地域とＪＡの心の距離をたしかに縮めてくれたのです。

二つ目の取り組みは、女性部活動における『家の光』の活用です。

安房地域は台風被害などを経験しており、防災意識がとても高い地域です。そこで私は『家の光』2025年12月号の防災特集を教材に、女性部で「防災ボトルづくり」を行いました。

誌面を片手に取り組む防災学習は、「もしもの時に家族を守るためにはどうすべきか」を自分ごととして考える時間になりました。

特に印象的だったのは、ある部員さんが、「災害の時、一番心配なのはやっぱり家族よね」と話しながら、孫のために小さな手鏡や飴をそっと加えていた姿です。その手元には優しさがあふれ、“防災とは、大切な人を想う行為そのものなんだ”と改めて感じたワンシーンでした。

『家の光』という“共通のテキスト”があることで会話も弾みます。災害の経験や家族のことを語り合う時間は、単なる学習会を超え、心が通うひとときとなりました。涙ぐむ部員もいたほどです。

また、『家の光』特集記事を活用したフラワーアレンジメント交流会も実施しました。安房産の彩り豊かな花を用いＪＡ八千代市の若手女性組織「アンシャンテ倶楽部」とＪＡ安房女性部 の世代を超えた交流です。同じ花を前にすると、年齢も地域も関係なく笑顔があふれ、「若い世代の感性に刺激をもらった」「安房の花がこんなに素敵だなんて知らなかった」と、互いに学び合い、認め合う時間となりました。

ある参加者は最後にそっと言いました。「『家の光』があったから、こんなに人と心が通じ合えたんだね」。さらに、この交流会の様子を広報誌で掲載したところ大きな反響がありました。

管内女性酪農家のファームイケダ様から“地域と共に歩みたい”という新たな連携依頼があり、ＪＡ安房でもフレッシュミズ組織の立ち上げを検討する大きな

一歩となりました。活動を通してつながったご縁が、また次の輪を広げていく――『家の光』は、ただの雑誌ではなく、“人と人をつなぐ灯り”。地域の人々、また世代を超えて“心の距離”を縮める力を持っていると強く感じました。

私の仕事は、直接的な収益を追うことではありません。しかし、『ちゃぐりん』で農の大切さを知った子どもたちが、いつか地域の未来を耕し支える力になる。『家の光』でつながった女性部が、地域の“支え合いの中心”として、人を守り、人を励まし続ける存在になる。そして、『ちゃぐりん』と『家の光』を抱えて学校や地域を歩いているうちに、私は気づきました。寄り添っていたつもりだった地域に、実は私が支えられていたこと。届けているつもりだった想いを、逆に地域のみなさんから受け取っていたこと。

「すわっち！」と呼ぶ子どもたちの無邪気な声。家族を想いながら防災ボトルにそっと飴を入れた女性部さんの優しい眼差し。安房の花を囲んで、世代も地域も越えて笑い合ったあの温かな空気。そのひとつひとつが、私に“地域の力”を教えてくれました。

子どもたちの小さな気づきは、未来の大きな力になる。大人たちの深い絆は、地域を守る太い柱になる。そして、その暮らしに寄り添うのが、ＪＡでありたい。私は、そう強く信じています。

いろんな場所に足を運び、声を聞き、笑顔を交わす一つひとつの瞬間が、やがてこの安房の未来をつくる大きな光につながっていく。私たちの活動は、時に目立たないかもしれません。でも、確かに人の心を動かし、未来を少しずつ変えています。

だからこそ、私はこれからも進み続けます。『ちゃぐりん』を胸に、『家の光』を手に、安房の地域とともに、一歩一歩、未来へ。この地域の灯りを、絶対に消さないために。

そして、ここからまた新しい光が生まれると信じて。

●家の光協会会長特別賞

相棒は『家の光』
～私の言葉でつなぐ小さなultra soul！～

岡山県
近藤　恵（58）

所属ＪＡ　ＪＡ晴れの国岡山
所属部署　津山基幹アグリセンター　経済課
組合員数　138,412名（うち正組合員85,487名）

私のそばには、いつも『家の光』があります。

『家の光』で読んだ記事を私自身の言葉に置き換えて、担当する地域の高齢者支援や女性部の学習の場でたくさんの思いを伝えてきました。

よく「近藤さん、何でもいいからお話して」と声をかけられます。少し「困ったな…」と思いながらも、気がつけば1時間なんてあっという間！『家の光』の記事で話がどんどん広がっていき皆さんの笑顔も広がり、私にとって『家の光』は頼もしい相棒です。

私が所属するＪＡ晴れの国岡山 津山統括本部は、城下町・津山市を中心に４つの行政が連なり県北部の広範囲に位置しています。人口約12万人、高齢化率39％の中山間地域で、米・野菜・果樹・畜産まで、多彩な農業が営まれているとともに、500m以上の標高差を利用した農作物のリレー出荷を行い、安定供給に努めています。

また、世界に誇るロックスターB'z の稲葉浩志さんの出身地として知られ、全国から多くのファンが訪れます。

私は、支店で信用共済窓口、ＬＡを経験した後、現在は津山基幹アグリセンターで、生活事業と女性部事務局を任され５年目になります。その中で私が大切にしていることは、「つながり」です。人と人、地域とＪＡ、女性部と地域、もちろん私自身とも、つながる可能性は無限大だと感じています。

その「つながり」を大切に育んできた活動の１つ、「フード＆ライフドライブ」の紹介をします。きっかけは、『家の光』2019年１月号にあった「貧困状態にある子どもは、７人に１人」という衝撃の一文です！「え？本当に？」と目を疑いま

した。

そこで、食と農を大切にするＪＡとして、「何か貢献できることはないん……？」「貧困という言葉でなく、私たちの暮らしぶりはどうなん？」と考え、当時の女性部長に相談をもちかけました。『家の光』を片手に取り組みのヒントを探す中、2018年10月号「どうなっているの？日本の食」という企画で、「フードバンク」活動を目にしたことを思い出しました。

ＪＡ女性部も関わっていることを知り、「これだ！！」と閃きました。すぐさま女性部員、女性総代、ＪＡ役職員150名を対象に「食品ロス削減」をテーマにしたセミナーを開催。そして肝心の食品の搬入先については、苦労して探し回っている中、偶然立ち寄った観光地で目に飛び込んできたＮＰＯのパンフレットをきっかけに、受け入れ先との出会いも実現しました。

こうして2019年、食料品だけでなく日用品も集めて寄付をする「フード＆ライフドライブ」がスタートしたのです！

しかし、コロナ禍に直面し物資が思うように集まらず、取り組みが進まない地区もあったことから女性部の事業計画に明記。あわせて食品ロスに関わる話題をテーマに、『家の光』を活用した研修を地道に重ね食品ロス対策を伝え続けました。

2023年には、総会や家の光大会で、「一人一品持ち寄り」を提案。支店長にも持ち寄ってもらうことで、ＪＡ職員の理解も広がりました。現在は３箇所の支店に回収カゴを設置し、地域の皆さんも参加してくださっています。

こうして2025年まで、集めに集めた物品は4,838㎏。それらは管内のひとり親世帯を中心に配布されています。これは「地域に根付いている」ＪＡと女性部だからこその成果だと思っています。

さらに、新たな連携も生まれました。青壮年部から「コロナ禍で活動が制限される中、女性部がどのような活動をしているのか知りたい」という声をきっかけに、すぐに「フード＆ライフドライブ」を紹介すべく、青壮年部の会議に乗り込んだのです!

すると効果てきめん！青壮年部長から「もっと知りたい」と口説かれ、物資の搬入先であるＮＰＯの代表を講師に迎え講演会を開きました。

ここで２度目の衝撃です！ 果物が豊富な岡山県ですが、生活支援が必要な子どもたちにとって果物は「めったに食べられない嗜好品」という、思いもよらない現実…青壮年部員も胸を痛め、すぐさま協力の輪が広がっていったのです。

こうして2022年からは、子どもたちを対象としたぶどう狩り、加工用ももの提供をスタート。子どもたちは「わぁ～食べていいの」と大喜び！

地元の農産物、時には生産に触れる「体験」を寄付するという、農業者だから

こそできる関わり方が、子どもたちの笑顔につながっています。

「フード＆ライフドライブ」で活気づいたことをきっかけに、2024年からは女性部の仲間づくりにも本格的に着手。『家の光』などを新規加入者特典として用意し、「支店便り」では毎月女性部の活動を紹介して、女性部の魅力発信に努めました。

すると、女性部による地道な声かけが実り、なんとこの２年で46人もの仲間が増えました！ 高齢化が進む地域でも、「仲間と一緒に元気に楽しく過ごしたい」という「人とのつながり」を強く願う女性の力に「光」を感じています。

こうした活動の中で、私は常に『家の光』を手に、「この情報で、どう地域とつながれるか」を考え、歩んでいます。もちろん、読者を増やすことが女性部やＪＡの活動に対する共感者を生み出すきっかけになることは、言うまでもありません。

とはいえ正直、年間購読の読者を増やすのは本当に大変です！！そこで、女性組織学習実践運動の９月号をきっかけに購読を広められるよう、女性部と一緒に2019年からの６年間で累計754部を普及！

あわせて12月号については、当ＪＡ統一で普及活用運動要領を掲げ、全職員の取り組みにより、2020年以降、増部数が全国１位に輝くこと２回、２位が３回という成果をあげ続けています。特に近年は、多くの地域住民に興味をもってもらえるよう「お金」をテーマにした記事活用を通じて、新たなつながりを意識した情報発信に努めています。

普及・活用を進める中で、私の心を強く動かしたのは、2025年12月号の特集「あると安心 防災」です。「絶対に『家の光』を活かして、地域とつながるセミナーをしよう！」と思い、防災学習会を企画。そして、女性部にもこの取り組みを広く知ってもらいたいと、部員の３％である16部を増部目標として特別普及を呼びかけました。結果はなんと目標を10倍以上も上回る174部の大増部！

これは大変！と、嬉しい悲鳴もそこそこにセミナーの準備をすぐに始めました。女性部、農家女性の部会、地域の高齢者を対象にしたセミナーを16会場で開催。これは、私の経験でもめったにない大きな反響です。

そのうちの一つ、今年で２年目を迎えたＪＡと葬祭センターが開催する『家の光』活用セミナーをご紹介します。昨年、葬祭センターの担当者から、「地域の皆さんのお役にたてるセミナーを開くことはできないだろうか？」と相談を受け、それならＪＡを知ってもらうきっかけになるよう、葬祭場で『家の光』活用セミナーの開催を提案。初年度は「幸せなお金の使い方セミナー」を実施。12名が参加し大好評でした。

そして、今年は「防災セミナー」です！「知って得するＪＡの備えセミナー」と題し、防災セミナーの他、共済担当部長による建更紹介、葬祭センター職員による葬儀のマナー講座など、部署を超え盛りだくさんのプログラムを企画。葬祭センターだからこそ「もしもの備え」に関心が高い20名もの地域の方が集まりました。

こうした取り組みが功を奏し、ＪＡ事業への理解と信頼が深まり、葬祭センターの会員数もこの２年間で298件増加。なんと2026年には当葬祭センターが行政と連携し、大雨洪水災害時における避難場所として提携することも決定しました。

地域と葬祭センターを「備え」で結び、地域拠点の１つとして必要とされるＪＡになる、そんな使命を叶えてくれた『家の光』活用セミナー。「地域の命を守る学びの場」として今後も定期的な開催を仕掛けていきます！

「みんなのくらしを豊かにする“愛されるＪＡ”へ」これは当ＪＡの経営理念です。

津山が誇るB'zの名曲「ウルトラソウル」の歌い出しにはこうあります。「どれだけがんばりゃいい？ 誰かのためなの？」……派手ではないけれど、「地域の暮らしを支え」「地域の安心につながり」「地域の未来を守る」そんな静かな力を『家の光』は持っています。これは、“愛されるＪＡ”の実現という当ＪＡの目指す姿そのものです。

始まりは、『家の光』で見つけた記事。私の提案を私の言葉で伝えたことで、女性部へ、青壮年部へ、地域へとつながっていきました。

これからも『家の光』を相棒に地域のみなさんの元気と命を守る事、それを役割として“静かなウルトラソウル”に支えられながら、どれだけでもがんばって伝え続けていきます。

さあ、みなさんご一緒に！ 「♪そして～輝く！ウルトラソウル♪」